

第1章 日本人に必要なインテリジェンス力

1. ヴェネチア、あるいはインテリジェンスの手本

塩野七生さんの「海の都の物語」

この素晴らしい本のおかげで、ヴェネチアという小さい国の大きな存在、大航海時代が始まる前までの地中海の女王の姿が「全部」わかる。この小さな国の豊かな国力は地中海を舞台にしての貿易、地中海の先は遠くインドや中国との交易品の扱いによる。その地中海ナンバーワンの貿易を可能にしたのは、巧みな外交政策であり、その外交を可能にしたのは、各地の状況をリアルタイムで把握するインテリジェンスであった。

この本によると、ヴェネチアから各国に派遣されていた大使からの「レポート」の客観性（感情を交えず冷静に観察する）と正確度は当時の世界水準をはるかに超えるものであったらしい。

ヴェネチアはどのようにして、当時世界最高水準のインテリジェンスを持つことができたのだろうか。一番の要因は、宗教的感情で目が曇ることがなかったことにあるだろう。キリスト教国ではあったがイスラムの国々と貿易するのに躊躇することはなかったし、それ以上に、宗教の違いで人を色眼鏡でみることもなかったようだ。

この宗教差別なし、人種差別なしの姿勢は、もちろん商業第一の功利から出ているのは間違いないにしても、根底にはもっと別の、それを当たり前とする文化あるいは普遍的な感情があったのではないだろうか。それは、一言でいえば、ギリシャ・ローマ文明から続く地中海文明によるものではないか。すなわち、宗教と人種と文化の多様性を当然の事実として受け止める普遍的な感情が地中海世界では受け継がれて来ていたからではなかろうか。

世界には様々な背景を持つということを前提として、さらには当たりの考え方として世界を見る眼と、多様性を理解できない、すなわち多様性に出会う機会が少ない地域に育った人の眼とでは、物事の正確な把握と報告において、格段の差が生まれるのではないか。

欧州においては、前者の多様性容認派は、ざっくりいえば、ラテン系民族であり、後者の多様性無理解派はゲルマン系(アングロ・サクソンもここに含まれる)、スラブ系ということになるだろうか。

インテリジェンスにおける正確度からみれば、多様性を認める姿勢からの状況把握と分析が優れていることは間違いない。それでは、欧州のインテリジェンスはラテン系のほうがいつも優れていたかと言うと、もうひとつの要因を検討しなければならない。

つまり、インテリジェンスには「勤勉」という要素が欠かせないということ。貿易で生きてきたヴェネチア人が勤勉であったことはまちがいない。人口の少ない国だから、「全員出動」で誰もが自分の能力に見合う仕事をわっせわっせとこなしていた。

一般的に言えば、ラテン系民族と「勤勉」は結びつかないので、せっかく多様性を認める、曇りのない眼を持っていても、このヴェネチア以降インテリジェンスに強い国が現れたとは聞いていない。

ただ一つ、大航海時代における、ヴァチカンを本山とするカソリックの布教組織は、多分当時世界最大の情報ネットをもっており、世界各地から刻々と情報がヴァチカン総司令部に届く仕組みになっていた。これは、宣教師というまじめ・勤勉な存在があつてこそ成り立った情報システムである。

ともあれ、ヴェネチアのインテリジェンスは、色眼鏡を掛けないで状況を観察し、感情をできるだけ混ぜないで枯れた筆致で報告する重要性をしめしてくれている。15世紀に到達していたこのレベルを超えられない例はそれ以降各国であり、特にわが国では顕著である。(篠原ブログ 2007. 06. 12. 篠原泰正)406

2.インテリジェンス、あるいはバイアス

インテリジェンスで大事なことの一つに、できるだけバイアス(bias 偏向、偏見)を掛けないでものを見る事がある。これは頭では理解できても実行はなかなか難しい。人は感情の動物だから、どうしても何らかのバイアスはかかっている。しかし、政治や軍事やビジネスの世界で、自分の感情に基づいてものを見ることは、できるだけ避けねばならないのは常識であろう。

一般的に、日本人は、バイアスを掛けずに、すなわち、その時の色眼鏡を掛けずに客観的にムラの外の出来事を見る事が苦手、あるいはできない。自分たち以外の人間集団を眺めるときに、蔑視のような偏向(バイアス)がかかっているれば、分析に間違えることは十分に考えられる。しかし、外の世界を眺めるとき、バイアスが強く掛かるのは何も日本人だけではなく、アングロ・サクソン系民族にも当て嵌まると思っている。

ただし、ここでのバイアスは、日本人のように自らを卑下したり傲慢になったり的高低型ではなく、一貫して自分達は一段と高いところにいる存在であるとの認識に由来しているのではなかろうか。(*)バイアスと無関心は違う

アングロ・サクソン系エリート達の特徴の一つに、人間の多様性への理解が薄いことがある。それは多分、自分達の優位性を意識するあまり、自分ら以外は全部ダメとみなしがちなところから生まれ、他民族を、ありのままに眺めることができにくいためであろう。

観かたを変えれば、彼らは対象となる人間や、その集団である民族を無機物的に眺め冷静に分析する業に長けているのではなかろうか。つまり、人間を人間として観察せず、自然の中の一つの対象物として眺めれば、それなりの客観的な分析ができるのかもしれない。

一方、バイアスのレベルが薄いのは、ローマ帝国の時代から地中海世界で多様な民族と付き合い混血してきたラテン系の人々であろう。それでは、彼らのインテリジェンスが、いちばん客観的かといえば、何しろ勤勉とは程遠いから(唯一の例外は昔のヴェネチア人)、客観的に眺める眼はあっても、インテリジェンスという概念は薄いようだ。先ずは家族との生活、そして地域社会とのコミュニティを優先する文化であるから、情報を集め分析するという作業は、ごく限られた人たちに限られているようだ。

3.日本が目標とするアメリカ様のインテリジェンス力

アメリカが日本との戦争を決心したのは何時だったのだろうか。1931年の満州事変以降、日本の動きをみながら、1937年の日中戦争勃発で最終的に決めたのだろう。アジアでの権益という面で、これ以上、日本をのさばらしておくわけにはいかない。もちろん日本の動きだけではなく、大恐慌(1929年)以降の復興をより早く強く大きくするためという国内事情もあったと思われる。

当時の日本政府(国家権力集団)が、どのような構造を持ち、何を考えているかは、アメリカは重々承知であったろう。このインテリジェンスをもとに経済制裁を含む戦略をたくみに組み立て、結局日本が暴発をせざるを得ないように追い込んでいったと思う。

特に欧州に参戦するためには当時、消極的だった国民を説得する必要があったから日本の暴発が、ぜひとも必要な出来事であった。これが、真珠湾というこれ以上願ってもない形で実現することになる。アメリカ国民の世論は一気に高まり、欧州参戦と日本潰しという両戦略は熱狂の中で進めることができたのだと思う。

日本を叩き潰す戦略が広範囲に考えられていたことは、戦争が始まる前から、**社会学者のルス・ベネディクトさん**に、日本人とは何か、彼らが構成する日本社会とは何かの研究を委託していたことでも明らかである。

占領後の日本をどのように統治すべきか、それを考えるためのガイドブックが必要であると、開戦前から準備されていたことになる。委託結果は社会学上の手本の一つともいえる**「菊と刀」**となって現れた。

このようにアメリカは日本政府の動きや考えは、優れた情報網で既に承知していた。しかし、日本社会の事情となるとよく分らなかった。表向きは近代国家であるが、その内実は**「不思議の国」日本**であった。事情をできるだけ掴んでおかないと占領政策を組み立てられないから、社会学という手法から把握に努めたわけだ。(07/06/11)

4.日本におけるインテリジェンスの歴史

日本は、公家と武家による支配権の取り合いで綴られており、さらに言うならば武家は、結局お公家衆に取りこまれていく繰り返しを示している。

武家、すなわち武門の人々の勢いが強かったときには、「**インテリジェンス**」とそれに基づく「**論理思考**」が表に出てきている。論理的思考の出発点は事実の把握、すなわち知性、インテリジェンスであるから、この二つは切り離しては考えられない。

武門の一番手である平清盛は、武門の棟梁である眼と考えを失わなかった。福原(神戸)への強引な遷都も、一門の公家化を押しやるためもあったろうが、何よりも、貿易国家、特にお隣の大国「宋」との貿易の拡大のためであった。つまり貿易に目をつけるだけあって、海外の出来事への関心、その情報の入手に熱心であったのだろう。

この平家を倒し、日本で初めて武家政府を打ち立てた源頼朝と、そのバックの北條一門は、海外に国を開く発想までは持っていなかったとはいえ、国内の状況把握は的確なものであったようだ。南は遠く薩摩まで守護・御家人を送り込み統治に成功したのは、並々ならぬ正確な情報の把握があったといえよう。御家人の全国配置は、全国各地からの情報が即座に入ってくる情報網の完成でもあった。

インテリジェンス力が高まったのは、次いで戦国時代であり、例えば伊達政宗やキリシタン大名のインテリジェンス力は高く、欧州の大航海時代に対抗できるだけの海外知識を得ていたと思われる。また武門では無いが、堺を拠点とする今井家をはじめとする大商人達の情報網がインテリジェンス力を高めていたに違いない。

徳川幕府による鎖国で200年眠っていた後、幕末は再びインテリジェンス力が上がったときであり、公家化していなかった下級武士・郷土層を中心とする人々の敏感な反応と動きのおかげで、独立国を維持することができた。

明治維新後の急激な翻訳本の出現は、彼らの危機意識の反映でもあったと思う。西洋の事情を知らなければ「ヤバイ」との意識が、翻訳本の洪水となって現れたのだろう、と推察する。

幕末から日露戦争までの凡そ40年ぐらいは、西洋の動向に大いに注目し、インテリジェンスの重要性も十分に理解されていた時期と言えるだろう。ところがその後、この習慣は消えてしまったようだ。

日本は、インテリジェンスゼロの時代を経て1945年、敗戦を迎えた。敗戦の復興を担ったのは製造業の人々であり、彼らは武門の人と呼んで差しつかえないであろう。アメリカを中心としての西洋事情にもう一度、敏感になり先進国の工業化レベルを追いつき追い越していった。しかし、それも40年で幕を引き、現在に至っている。

この20年、国家の経営を担う人々から企業の経営を担う人々まで、そして民衆まで、日本を挙げての知性の劣化は、インテリジェンス力の劣化の裏返しである。状況の把握を怠れば、考えなければならない課題も出てこない。課題がでてこなければ、対策を考える必要も無い。対策が考え出されなければ行動もそこには無い。

今や日本の知性(インテリジェンス力と論理思考力)は地に堕ちた。再び「知性の貧困」の時代が始まり、いまなお続いており、日々その病状は深刻化している。



5.このままでよいのか、日本の「インテリジェンス力」

インテリジェンスへのニーズは、生き延び、敵に勝つためにある。かつて、ユーラシア（欧亜大陸）の遊牧民は、馬や羊の餌になる草のありかを的確に知ることが命がけであったという。族長の最大の責任は、春から夏にかけて何処へ行けば草が青々と茂っているかを見極め、行く方向を決定することにあつたという。それに失敗すれば、一族郎党は行き倒れになりかねない。各地の情報集めには必死であつたであろう。

「むら」という共同体（現代では会社など）で生きてきた日本人は、その眼がどうしても内に向いてしまい、なかなか外に向かない。また時間においても、その「むら」のなかで過去にさかのぼって原因追求などしていると、変り者あつかいにされるであろう。

このようにみえてくると、われわれ日本人がインテリジェンスに弱いのは当然のところ
で、その能力を高めるためには、意識して努力することが必要となる。鎖国をして、日本列島の内で静かに穏やかに生きていけるのであれば、何もインテリジェンスは必要ないが、厄介なことに、そうは行かなくなったのが、日本の現状である。

敗戦から20年ほどは、世界の中の日本を強く意識し、西洋世界、特にアメリカ製品との比較をしながら日本人が得意とする「物作り」を懸命に励んできた。その時には、それなりのインテリジェンス力があつた。しかし、そのあと20年、日本は先進国と呼ばれ「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と舞い上がり、眼がすぐに内向きになった。

我々日本人は、お気楽な民族だから、今に生きる文化だから、過去に執着しない民族だから、などなど、この変わり身の早さは色々な角度から説明がつかだらう。しかし、国、社会、企業といった集団を経営するやり方を、自分の頭で考え実行し検証するという論理的プロセスが定着していなかったことが、多分、致命傷となっているはずだ。

結局、我々日本人は、その一般的な特質として、世界の歴史の中での位置づけ、世界という地理の上での位置づけを、客観・冷静に眺めることができないままにきている。卑下することもなく、傲慢になる事もなく、あるがままに眺めるという姿勢は、一般的な日本文化としては根付くことがなかったようだ。インテリジェンスの力を強化することは、このように、現在の日本においては、ほとんど絶望的なまでに至難のわざとなっている。

6.インテリジェンスを高めるには、どうする日本

一国のインテリジェンスの力は、そのときの国力に比例していると考えられる。国力が健全ならインテリジェンスもまともに働き、そこから考え出される戦略も、ぴたりぴたりと壺にはまるようだ。

一方、国力が衰えていると頭も疲れるようで、まともなインテリジェンスは働かず、戦略は戦略と言えなく場当たりのになる。それは論理性のかけらもない感情に基づく、あるいは根源的な文化に基づく、非合理的な威勢の良い響きある言葉で叫ばれ受け入れられるようになる。それは、まさに「**貧すれば鈍する**」という例えのとおりである。

インテリジェンスの衰えは論理的思考力の衰えを招く。全体の中の位置を確認することがインテリジェンスとすれば、それに基づく策、すなわち戦略は、その全体の中でいかに勝利するかを考え定めるものとなる。日本では政府から企業まで、「戦略」という言葉が大好きで、そこら巷に溢れているが、本当に「戦略」という名に値するものが少ないのは、全体把握の必要性が理解されていないことによるのだろう。

しかし、全体図の把握に弱いのが日本人の特徴であるという、それは言いすぎである。先の「4.日本におけるインテリジェンスの歴史」で述べているが、武門の人々が力を握っていた時には、全体把握に怠りはなくインテリジェンスにも不足はなかった。

とは言え、何故か？この特質は日本全体に普及することがなく、それが「文化」といえるレベルまで一般化しなかったのも事実である。つまり過去に生じた事実に関する知識をもち、その歴史事項をどのように判断すべきかの思考力をつけることは、インテリジェンス力を強化するのに重要な部分である。歴史に無知なインテリジェンスはありえない。したがって、我々日本人は歴史をできるだけ学ばなければならない。

つまり世界の中での日本、あるいは企業の存在価値を近代という歴史の中で、今の時点にいるのかを確認し続けることが、先ず必要とされている。

例えば身近な話として、敗戦後それまでに汗水流して作り上げてきた日本式のよさを捨てて、市場経済だとかリストラクチャリングだとかグローバル化とか、理論ともいぬ理論、つまりアメリカ式プロパガンダに乗せられて自分で自分の作品を壊してきたことへの評価は、どのようにされているのか。

7.インテリジェンスの使い方を間違えない

2023 年は、地球温暖化の影響で猛暑となった。また大雨、山火事等の気象災害も合次いだ。更に大きな戦争を抱えて新しい年を迎えることになった。これからの世界は、どうなるのか？人間は、なぜ戦争するのか？

戦争は悪と善の戦いでなく、お互いが正義で憎しみ合い、時には殺し合っている。つまり対立は、排除を生み、排除は恨みを生む。恨みは連鎖しておさまらない。このことは悲しき人間の性で、未来永劫変わらないであろう。

対立は西洋、東洋に係わらず繰り返されてきたが、中国の古典「菜根譚」にこんな諺がある。「古人、貧らざるを、もって宝となす」。これは欲張りの心が知恵を曇らせ、善悪の判断力を失いさせ、人間を愚かにしてしまうのだ、という教訓、戒めの言葉である。(矢間ブログ 2023 年 12 月 31 日)

太平洋戦争が始まる 1940 年当時のアメリカは体力・気力がもっとも充実し始めた時期であったと思う。従ってインテリジェンスの力もそれに基づく戦略も誠に妥当なものであった。対して、日本のインテリジェンスの力はお粗末であったと言える。ノンフィクション作家の保坂正康さんが太平洋戦争について述べている。『この戦争は「軍官僚の起こした戦争」であり、彼等の狭い視点での「主体的には歴史観のない」戦争であったと言っても良いと思える』(引用) 歴史道 太平洋戦争全史(朝日新聞出版)

1933 年 2 月、国際連盟総会の場で 42 対 1 の圧倒的多数で可決されると、日本代表の松岡洋右は過激な演説をして退場した。日本政府は国際連盟を脱退して国際社会から孤立した。しかし松岡洋右は、日本国民から熱狂的な支持を得て、瞬間に「ヒーロー」となった。当時のメディアは大本營の発表を、そのまま国民に伝え続けるだけであった。都合の悪い情報を遮断するのは権力者の常とう手段である。民衆がインテリジェンス力を身につくことで、自分の権威が薄らぐことを恐れているからだ。タレントのタモリさんが「新しい戦前になるんじゃないなでしょうか」と、テレビで発言したことが話題になっている。(*)朝日新聞出版から2023年8月に『新しい戦前』が出版されている)。

1940年当時と現在のアメリカを比べると知力・知性は格段に落ちており、従ってアメリカの強みであったインテリジェンスの力も多くの綻びがみえてきた。日本はアメリカ様に従属し、ペイコク主導の戦争に日本が巻き込まれないことを願うしかないのか。